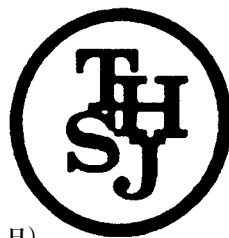


日本ハーディ協会ニュース
NEWS from THE THOMAS HARDY
SOCIETY OF JAPAN



第78号 (2015年9月1日)

発行者 〒162-8601 東京都新宿区神楽坂1-3

東京理科大学1号館1603A研究室内 日本ハーディ協会

編集者 〒606-8588 京都市左京区岩倉木野町137 京都精華大学 北脇徳子



THE VILLAGE FESTIVAL by F. Goodall

(提供:那須雅吾氏)

ハーディ協会の思い出など、徒然なるままに

津田聖子

76号の巻頭言で、橘智子先生のお名前を懐かしく拝見した。博士課程後期に進み、研鑽の日々を送られている由、不死鳥のごとき生命力に感服した。私はといえば、ここ数年来体調を崩し、昨秋久しぶりに西南学院大学の大会に出席したところ、ニューズレターの巻頭言を書くよう依頼された。巻頭言を汚すことを、まずお詫び申しあげる。

ハーディ協会に入会して早や40余年、随分永い間お世話になった。思えばハーディとの出会いは高校時代、読書感想文の課題として選んだ『テス』に始まる。苦勞して読んだ挙句、印象に残ったのは、エンジェルがテスの告白に怒ってブラジルに行ったこと、アレクがテスに、結婚してアフリカに行こうと誘ったことである。少し学べば、自明の理となるのだが、その時は驚いた。結語の「正義」も気になったが、これはまた後で触れる。

こんな訳で、ハーディは何となく気になる作家となり、読み始めたが、『キャストブリッジの町長』と『塔上の二人』が面白かった。ヘンチャードが「市」で妻を売り、外国人のニューソン

が買って行ったことや、スウィジンの夢が喜望峰の Royal Observatory で実現することなどが、私の好奇心を刺激した。

さて、英文科に入り、卒論に選んだのは結局『テス』だった。もともと法学部志望だった私の興味は相変わらず小説の文化的背景にあったが、それは邪道だということで、Immanent Will だとか Wessex などをキーワードとする歴史批評に基づいた卒論を何とか書き上げた。大学院に進んでエリオットに転向したが、「日本ジョージ・エリオット協会」はまだ誕生していなかったので、ハーディ協会に入会した。

全国大会に初めて出席したのは40年ほど前、たしか九州の大学だった。金沢大学の大沢衛会長が厳然として君臨され、今は亡き中央大学の吉川道夫先生が事務局長として若々しく立ち働いておられた。深沢俊先生、森松健介先生、藤田繁先生など、金沢大学と中央大学の先生方が黎明期のハーディ協会を支えておられるという印象をうけた。懇親会場は和室で各自の前にお膳が置かれて、端まで見えないほどの盛会ぶりだったが、女性の姿は殆ど見当たらず心細かった。

時とともに文学の研究法も変り、1991年、会長に就任された吉川先生が「これからは、いよいよ文学の文化研究だよ」と言われ、我が意を得たりとばかり嬉しかった。短編小説についてのシンポジウムが企画され、滝山季乃先生、杉山洋子先生、橘智子先生、それに私がメンバーとなった。

ハーディ協会の思い出は数々あるが、皆川三郎第2代会長の特別講演も忘れ難い。ヘンチャードの wife selling の謎が解けたのである。「wife selling が、離婚できない法律の下で、不幸な結婚を解消して幸せを掴むための、いかに合法的手段であるか」、ユーモラスに話される皆川先生の講演には実感が籠っていた。

ハーディ協会に入会した頃、菊池先生はじめ当時の長老方は、大会の休憩時間に『テス』の結語の「正義」について熱心に議論しておられた。正直余り解からなかったが、いわゆる「正義」が私なりに実感できたのは、ブッシュ大統領がイラク攻撃を正当化するために、演説で justice を繰り返した時である。「正義」を信じて戦った若者たちが「正義」の実体に気づいた時は後の祭りだった、という悲劇を聞くにつれ、ああ、これがテスを死刑にした体制の「正義」であり、ハーディの皮肉を込めた「正義」だったのだ、と思った。

戦後70年、わが国では、巨大与党が、集团的自衛権を合憲だと主張して「戦争法案」を強行採決し、日々報道規制を強めるなか、ある日突然「正義」を掲げる時が来るのではないかと、戦争体験者として危惧せざるを得ない。

平成元年に始まった内田能嗣先生主催による「ハーディ協会関西支部」の読書会で、詩をじっくり読む機会を得たのは幸いだった。膨大な詩の中で、私が胸打たれたのは、破廉恥なボーア戦争（1899-1902）を非難する戦争詩（54-64）である。この戦争の大義を信じてサウサンブトン港から遠征する兵士と、それを見送る家族たち、また、老妻を残して戦場に向かう老大佐、そして、着任早々戦死して異郷に朽ち、夜ごと巡る南天の星座群の下で永眠する羽目となったホッジなど、これら一連の戦争詩は、さながら絵画のように私の目に焼き付いて離れない。同時代の作家の中には体制追従のまま逝った者もあったが、ハーディは、ダイヤモンドに目の眩んだ大英帝国に向かって、敢然と反戦詩を書いたのである。作家は反体制でなければ意味がない、という大江健三郎の持論が頭をよぎる。

文盛堂と『テス——運命小説』

上原早苗

明治に呱呱の声をあげた出版社の一つに文盛堂がある。英語教科書の『ナショナルリーダー』や外国語辞書、習字教本、道徳読本など、若者の教育に裨益する書籍を数多く刊行した出版社である。創業者・榊原友吉（1856-1946）は明治23（1890）年に東京書籍出版業者組合（後に東京書籍商組合に改組・改称）の役員に選出されると、昭和21年に亡くなるまで久しく東京書籍商組合の発展に寄与した人物だった。明治に誕生した中小出版社はそのほとんどが消えてしまったが、文盛堂は三友社と社名を変更し、平成の現在も印刷業界で活躍する希有な存在である。三友社の「友」はおそらく「友吉」の「友」からとられたのではあるまいか。

なぜハーディ協会のニューズレターに文盛堂か。日本におけるハーディの受容事情に通じておられる諸兄諸姉には愚問かもしれぬが、*Tess of the d'Urbervilles* の訳本を日本で初めて刊行した出版社と言えば、若いハーディアンにもなるほどと思っただろう。明治創業の出版社の常として文盛堂の出版目録は現存せず、明治45（1912）年に刊行された『テス——運命小説 前編』（以下『テス』と略称）が一体何部刷られたのか、判然としない。今、私の手許にあるのは大阪樟蔭女子大学図書館収蔵の1冊を借り受けたもので、表紙は目にも鮮やかな常磐色に金の文字と銀の絵柄、おそらく『テス』は当時贅沢な部類に入る版本だったと思われる。訳者の山田行潦については色々調べてみたが、残念ながら、早稲田大学出身者ということぐらいしか判明しなかった。翻訳作業は困難を極めたのか、後編は広告が出されたが、ついに出版されることはなかった。

未完とはいえ、伏せ字の使用された『テス』は日本の出版文化史の観点から興味深い書籍である。明治26（1893）年に出版法が改正され、出版社は書籍刊行の3日前までに、内務省警保局図書課に出版届とともに製本2部を提出し、図書課の検閲を経て出版・頒布の許諾を得ておく必要があった。ちなみに納本された2部のうち、1部は正本として検閲業務に使用され、残る1部は帝國図書館（現在の国立国会図書館）に副本として収蔵された。製本済みの書籍が検閲の結果、頒布禁止処分となれば、出版社は損害を被ることになる。そのリスクを回避するために、出版社が法の介入に先んじて〈口にしえないもの〉を遮蔽する記号、すなわち伏せ字を使用したことは夙に知られる。

榊原友吉の判断だったのか、それとも他に編集者がいて、その編集者の判断だったのか、『テス』の18箇所伏せ字が使用されている。その一例として、第1局面 'Maiden' 第11章のチェイスの森の挿話を見てみよう。アレクとともにチェイスの森を彷徨ううちに、テスは次第に疲れて眠りに落ちてしまい、'maiden no more' となる例の挿話である。チェイスの森の挿話を読み始めると、すぐに次のような伏せ字にぶつかる。

「汝なぜ僕の〇〇を厭がるんだい？」〔中略〕

「汝僕が〇〇しようとする度腹を立つたかい、さうでもなからう？」

「腹立つた事もありますサ」

「何度ぐらる？」

「お前様がよく知つてるに——勘定の出来ねほどだサ」

「僕が〇〇しようとした度だね？」（134-35頁）

ハーディ協会の諸兄諸姉にとっては、あまりにも簡単な謎解きかもしれない。勿論、伏せられているのは、「キ」「ス」あるいは「接」「吻」の二文字である。それでは、次の伏せ字はどうだろ

うか。

しかしアレクサンダは無理に手を伸ばして以前のやうにテスを〇〇〇めた、今度は彼女も逆らわなかった〔後略〕（138頁）

これも簡単だろう。明治の出版社は、何が伏せられているか、読者に分かるように伏せ字を用いたと言われているが、なるほど山田の翻訳も何が伏せられているかは明確に分かる。ちなみに、国会図書館デジタルアーカイブに公開されている『テス』の当該箇所を見ると、ご丁寧にも「抱」「き」「し」の三文字が読者の手で書き込まれている。

とすると、伏せ字というものは伏せる身振りをしつつ、その実、伏せられるべき内容を読者に伝える記号ということになる。あるいは、出版社による自己検閲の痕跡を露わにし、〈口にしえないもの〉と〈口にしうるもの〉との境界線を読者に伝える記号だと言ってもよいだろう。ヴィクトリア朝イギリスでは、グランディズムという名の検閲が作動し、出版社は自己検閲を余儀なくされたが、活字テキストに検閲の痕跡を残すような「甘い」ことはしなかった。〈口にしえないもの〉は跡形も無く削除されるか、〈口にしうる〉言葉に置き換えられるか、そのいずれかである。彼の国の徹底した（自己）検閲に比べると、山田の翻訳に残された伏せ字には、たとえ形式的にせよ伏せられるべきものが伏せられていれば不問とする/される、検閲官と出版社との阿吽の呼吸とも言うべきものが感じられるのだ。

ここで話を文盛堂に戻せば、平成24年11月に三友社を訪ね、文盛堂時代の書籍を拝見する幸運に恵まれた。刊行物すべてが現存するわけではなく、会長の西野久雄氏はこれまで山田訳『テス』をご覧になったことはなかったそうである。私の持参した『テス』を、我が子を愛しむかのように手にとられたのが印象的であった。ご高齢にもかかわらず、本業の印刷業を始め多方面でご活躍のご様子であったが、現在もお変わりなくご健勝であられるだろうか。氏のご健康と三友社の益々のご発展を心から祈り、筆を擱くこととしたい。

ハーディと私 その後

向井秀忠

トマス・ハーディについては、常に気にしながらも、しばらく直接的な研究から離れてしまったこともあったが、ここ数年は、『ダーバヴィル家のテス』と『日陰者ジュード』を中心にいろいろと考えることが多くなった。ハーディから関心が離れ気味になっていたのは、どこかで「ハーディは無神論者だ」と勝手に決めつけてしまって、それ以上は深く考えようとはしないという、自分の浅はかな研究姿勢が大きかったからである。それが改まったのは、現在の職場に移ったことが大きかったかもしれない。

キリスト教系の大学に勤務することになってから、確かにキリスト教に日常的に接するようになった。毎日のお昼休みの礼拝の時間などもそうだが、何よりも大きいのは、研究の話を含め、結構、キリスト教にまつわる具体的なコメントを聞くことができることではないだろうか。実は、ハーディの諸作品について再考してみようと思ったのも、そのような日常生活での会話がきっかけになった。

もともとヴィクトリア朝の時代風潮が持っている斬新さや猥雑さに興味があり、その延長線

上から、この時代に多くの改宗小説が書かれたことを知った。オックスフォード運動の牽引者のひとりであった John Henry Newman も *Loss and Gain* (1848) という小説を発表し、Mrs. Ward の *Robert Elsmere* (1888) が大ベストセラーとなったこれらの小説群は、研究者以外はなかなか触れることもないであろうが、今では、1975年に New York の Garland 社から出された“Victorian fiction : novels of faith and doubt” というシリーズなどでその多くを読むことができる。これらの小説を読みながら考えるのは、さほど面白いとは思えない「改宗」というテーマの小説がなぜこの時代にこんなにも書かれたのか、という単純な疑問であった。チャールズ・ダーウィンの進化論を持ち出すまでもなく、この時代においてはキリスト教への信仰が揺らいだと説明されることが多く、そんな不安定な時代だからこそ、信仰のあり方を見直す論争が起こったことはすぐに連想されたが、実際、どのような状況だったのだろうか、これらの小説にさらに興味を引かれることになった。

ヴィクトリア朝の改宗小説についていろいろと読んでいることを建築史が専門の同僚に話したところ、近藤存志先生もヴィクトリア朝期の建築におけるネオゴシック論争に興味を持っており、二人の興味がヴィクトリア朝時代の信仰活性の動きという共通の源泉から始まっていることがわかった。それぞれの分野における先行研究などを教え合ううち、建築の専門的な知識を持つ小説家であるハーディに話題が行き着くことになったのも自然なことであった。主人公が石工でもある『日陰者ジュード』におけるスーの言動や教会建築が描かれている場面などは特に興味を惹かれ、そんな時、たまたま当時の日本ハーディ協会会長であった玉井暉先生よりシンポジウムの企画を任せただけのお話をいただき、それでは二人のこの興味を中心に何かできないかと具体的に考えることができ、第56回大会における「トマス・ハーディにおけるヴィクトリアニズムと〈信仰〉」という企画でもって結実することになった。

このシンポジウムでは、福岡大学の福原俊平先生にもお手伝いをいただき、ハーディの作品における〈信仰〉の問題を多角的に論じることを意識した。近藤先生は、特に教会建築家であったハーディに注目し、当時の建築界におけるゴシック・リヴァイヴァルの動きと呼応させることで、ハーディの批判の矛先が、キリスト教そのものではなく、むしろ形骸化した当時の教会のあり方であったことを『ジュード』を中心に論じられた。これまで文学者としてのハーディに注目しがちであることを考えると、これに建築家としてのハーディの意識に分析を加えることで、あまり注目されなかった側面に目を向けさせる新鮮なものであった。福原先生は、ハーディにとってのダーウィニズムの重要性に着目され、進化論における道徳や利他主義という観点からテスやジュードについて行われた作品分析からも学ぶべきことが非常に多かった。ヴィクトリア朝時代の宗教活性運動と小説とのつながりについて考え始めていた私にとって、非常に個人的な感想ではあるが、このようなシンポジウムを持つことができたいに得ることが多かった。

最後に、これからの自分の興味と課題についてまとめることで、「ハーディと私 その後」と題されたこの文章をまとめた。このような議論の機会を与えられ、自分の興味はますますハーディの作品から彼のキリスト教に対する姿勢を再考するものへと向けられることになった。特に気になるのは、やはり後年の二作品、『テス』と『ジュード』においてハーディがキリスト教や教会のあり方についてどのように描こうとしたのか、という点である。この二つの作品を中心に、ハーディの小説を当時の信仰活性の動きとの関わりにおいて考えていくことが当面の大きな関心である。

ハーディと私

—ギヤスケルからハーディへ—

河井純子

10数年前からハーディ研究者の方々の研究発表を聴く機会を多く与えられるようになり、この作家の、こじつけではなく、多様なアプローチを許す大きさに圧倒される思いを味わってきた。それとともに思い出すのは、もっと以前、初めて訪れた頃の英国で、ハーディのウエセックスをたどる一般向けツアーが行われていて驚いたことである（カントリー・ツアーの側面が強かったかもしれない）。

18世紀のイギリス小説から勉強を始めた私は、小さなきっかけから、ヴィクトリア朝小説へ興味を移したが、ハーディ作品を読むことが要求するものの重さや大きさを、恐れる気持ちが長くあった。ただ、後の時代にも通ずるテーマや、生々しい読書体験を供するからと言って、ハーディがすぐれて19世紀的な作家であったことを無視できないのは、この作家をいまだよく知らない私にも察しがつく。当然、研究者や一般読者を惹きつける理由の一部もそこにあるのだろう。ことに、ヒロインたちの運命を決する出来事に、時代特有の事情が絡むのは、私の主な研究対象であるエリザベス・ギヤスケルの作品と変わらない。

じっさい、テスと同様の「墮ちた女」、あるいは男性の裏切りに一生を狂わされる女であるギヤスケルのヒロインたちにも、その母性を強調される一方で、生き抜くために苦労を重ね、精神的な成長を遂げようとも、いわゆる世間知を身につけた大人というよりは清純な娘のままである、という例が見られる。「家庭の天使」になれない女たちが、定義上は、それにふさわしい素質を備えているのが皮肉であり、痛々しい。彼女らが生き永らえることを許されないのは、現実には女性たちが置かれた状況の苛酷さをギヤスケルが強調したかったからなのか。それとも、男性作家としてハーディが女性を見たように、中産階級出身の作家として、ギヤスケルが労働者階級の女性を見た時、悲劇を招き寄せるエージェントとして、彼女らの存在の可能性に魅力を覚え、同時に統御の必要性を感じたということだろうか。

もちろん、ユニテリアンの牧師の妻であったギヤスケルの物語には、贖罪と赦し、そして和解放もたらす救いがある。また、家庭を司る務めを果たすヒロインたちには（自らを抑圧するイデオロギーに与した結果とは言え）力と威厳が与えられ、それは女から女へと受け継がれるはずのものであった。母から娘へ、この受け継ぎがうまく行われない場合に悲劇が起こる、というのは、周知のように、ヴィクトリア朝のヒロイン小説には珍しくないパターンである。しかしギヤスケルにとって、自身の生い立ちとも深く結びつく母親喪失のモチーフは、プロットの要請であるという以上の意味があった。そして彼女の作品において、失われた母親からの愛情と保護の代わりに、繰り返し表れてヒロインを支えるのが、女同士の連帯の力である。

娘が母から受け継ぐもの、あるいは女同士の連帯などと言うと、ハーディ小説の中心からは遠のいて行くばかりのように聞こえるかもしれない。しかしギヤスケルは、たとえば社会制度としての結婚を、男と女の双方にとって陥らざるを得ない罠のように描くこともした作家である。男女が相手に求めるものの違いを越えられず別離に至る、あるいは砂を噛むような夫婦生活を（そこから目を背けながら）続けて行く。いずれにせよ、お互いの精神、そして時には肉体をも損なわずにおかないような関係が生まれるには、個人の選択では変えられないものの力が与っていることを、かの時代の作家として、彼女も強く意識せざるをえなかったのではないか。だからこそ、クランフォードのようなアマゾネスたちのユートピアも、滑稽さとともに、何かしらの可能性をも窺わせる世界になりえたと言えるだろう。

同性間の連帯が、弱者の団結、あるいは社会から課せられた役割の確認をお互いに行う場とい

う意味を超え、異性を（ほぼ）排するに至れば、むしろ、それは滅びへ向かう世界となる。表向きは積極的な結びつきのように見えても、跡を継ぐ次世代を持たないものたちの不利な立場は明らかだ。しかし、性を介した「自然」な関係が行き詰まりを見せるとき、そうではない関係に（一時的なものにせよ）可能性を見出そうとする試みは、いろいろな作家によって為されてきたように思われる。

ハーディの場合はどうであろうか。見出されるものが正負どちらのメッセージかはわからないが、私はまず、そのあたりに注目しながら、ハーディに近づいて行きたいと考えている。

若者と読むトマス・ハーディ

菅田浩一

私がハーディの著作と初めて出会ったのは、大学1年生のときの教養英語の授業である。*The Return of the Native* の冒頭の部分を読み、美しい英語とその英語が生み出す壮大なイメージに圧倒された。正直、英語ってこんな表現もできるのかという驚きと感動があった。それまで自分が読んできた英語と言えば、中学校・高等学校の英語の教科書や受験の参考書やラジオ講座のテキストくらいだったので、それはそれで英語を勉強する楽しみがあったが、ここまで美しいイメージを喚起する英語に触れたのはそのときが初めてだと言っても過言ではない。これをきっかけにハーディ作品に興味を持った私は、*Tess of the d'Urbervilles* や *Jude the Obscure* を少しずつ読んだ。月並だが前者では美しい自然描写に心惹かれ、*Tess* の死に人生の過酷さと憐れを感じた。後者は日本語訳を入手できなかったので、粗筋を読み取るのに精一杯だったが、物語の最後近く、*Sue* の悲鳴を聞いて駆けつけた *Jude* が目撃した子供たちの死の場面では、思わずページをめくる手が止まった。何度も前後を読み返し、状況を確認したが、幼少期はともかく、大人になってからの私自身の読書体験のなかで、これほど悲しく衝撃的な場面は読んだことがなかった。その前夜の *Sue* と *Little Jude* の会話を読んで、このまま寝るのはまずいのではないかな？と思ったが、子供たちの死は想像もしなかった。

やがて大学を卒業した私は、数年間は仕事の関係でハーディと離れたが、大学院進学を契機に再びハーディの作品を読むようになり、その後、現在勤務する大学への就職が決まった。就職した当初は主に英語文学や一般教養的な英語の授業を担当していたが、数年前に実施された学内のカリキュラム改革に伴い、日本文学や比較文学関連の授業、つまり日本文学・外国文学を問わず、幅広く文学作品を読む授業が主たる担当科目となり、現在に至る。したがって、私の授業では英語は苦手だが文学作品を読みたいという受講者が多いため、英語文学を扱う場合、まず日本語訳を読み、必要な箇所だけ原文を抜粋してプリントを配布し、私が解説するという格好で授業を進めている。もちろんハーディはぜひとも扱いたい作家であり、どのようにハーディの作品を扱えばいいのか、今の若者がハーディを読む意義はどこにあるのか、といったことを考えながら試行錯誤の状態である。

そのなかで思うのは、やはり現代の若者が昔の文学作品を読むためには、どこか今の自分に引きつけて読むような視点がないと難しいのではないかと、ということだ。ハイレベルな大学院の授業では様々な批評理論を学び作品を分析すると思われるが、それでもやはり、文学作品を読む際の土台は作品を読んだときの感動であり、登場人物の人生を擬似体験しながら、生とは何か、死とは何か、など、作品を今ここに生きている自分に引きつけて考え、自分自身の想像力や感性を磨くことだと思う。同時に、私は大学教員なので、大学生相手に文学を読むことの意味や自分自

身がなすべきことに関して考えざるを得ない。

たとえば、現在私が担当する科目のなかに、現代をテーマにした小説や映像を鑑賞する授業がある。扱う作品は様々だが、テーマは「現代のリアル」と設定し、You Tube でカップヌードルの CM の REAL シリーズを鑑賞するなど AO 機器を活用しながら、real の定義を概観した後、リアルとフィクションの境界が曖昧になる、あるいはリアルという概念自体が大きく変容した現代社会において、自分自身はリアルをどう定義するのか、リアルに生きるとはどういうことか、どんなときに自分は生きているという実感を持てるのか、学生に質問することになっている。様々な回答があり楽しいが、自分自身が学生だった頃と比べて、将来に対する不安要素が多く自分に対して自信を持ってない、勉強に没頭できない、真っすぐに恋愛やアルバイトを楽しめない、といった若者が増えているように感じる。

次に香山リカの『多重化するリアル』（2006年）、金原ひとみの『蛇にピアス』（2004年）、塚本晋也監督の映画『悪夢探偵』（2006年）等、比較的最近の著作や映画においては「生きることに對して現実感を持ってない」という文章や台詞が驚くほど類似した言葉で反復されているので、これらの作品を鑑賞し、解説を行った後、レポート提出を求める。自分の抱えている悩みや普段考えていることを作品からの引用を交えて語る者もいれば、各作家の他の作品を自分で鑑賞したうえで程度本格的な作家論・作品論を書く者もいるが、いずれにせよ全員がありきたりのレポートではなく、それぞれの顔が見えるようなレポートを書いてくるので、読んでいて楽しい。

このように学生とテキスト、教員と学生との間に双方向的な関係を持たせるような授業の教科書として、ハーディの著作は十分に通用すると思う。たとえば *Jude the Obscure* では進学や就職、恋愛や結婚や育児など学生にとって身近なテーマが描かれるので、学生は登場人物の直面する問題を自分自身の問題として捉え、自分ならどうするか、登場人物はなぜこんな言動をするのかなど、いくつもの疑問を持ち、それらの疑問を当時の英国における社会的文化的背景に照らして考えている。さらにマイケル・ウィンターボトム監督の映画『日蔭のふたり』を鑑賞するが、*Jude* の最後の台詞「たとえこの世が減んでも僕らは夫婦だ！」は荒涼とした雪の街の風景と哀切な弦楽器の BGM とが相まって物語に深い余韻を残しており、学生も熱心に鑑賞している。レポートでは当時の英国の社会状況を理解するのが難しかったという意見はあるものの、*Jude the Obscure* という作品が多く学生の心に深い感動を呼び起こし、ハーディという作家が各学生の心に残ったことが分かる。

他方、「生きることに對して実感を持ってない」という先述のテーマに関しても、ハーディの作品は魅力的だ。なぜなら、ハーディの作品では Immanent Will や当時の社会システムなど、個人の力ではどうにもならないようなものに翻弄されながら、それでも前向きに生きる人物像が描かれており、とりわけ大自然のなかに立つ登場人物の姿が美しく感動的だからだ。たとえば *Far from the Madding Crowd* において Gabriel Oak が産まれたばかりの子羊の世話をした後、星空を見て時刻を推測する場面（2章）や Oak と Bathsheba が農場の穀物を守るべく嵐のなかで奮闘する場面（37章）などは、読んでいて、まさにこの人たちは生きているということが十分に伝わってくる。もちろん小説はフィクションなので実際にそんな人物がいて作品に描かれたような行為をとっている訳ではないが、「生きる実感を持ってない」現代人が、ハーディの美しい英文を通して生の充実感を擬似体験することはとても意義深いことだと思う。ゲームや SNS など、仮だけれども本場で、したがってどちらが現実か分からない virtual reality に慣れ親しんだ学生に対する応援歌である。だからこそ、私は今後も授業においてハーディ文学を読み続けたいと思っている。

《シンポジウム予告》

『ジュード』再読

“Shelleyan would be nearer to it.”

深澤 俊

ハーディの小説は、後期に行くほど暗くなる。これはよく言われてきたことであり、不可知論やらダーウィニズムの影響なり、イギリス国家の財政逼迫やら国際情勢などの社会的要因も、作品の雰囲気や暗くするものには違いない。しかし小説技法の観点から再考察してみると、伝統的リアリズム手法が行き詰まりを見せ、ヴァージニア・ウルフのように‘modern fiction’を声高に宣言できなかった作家の悩みの結果でもあることは明白である。ウルフに批判されたベネットたちの世代よりも先輩に当たるハーディに、かえってモダニスト的な苦悩が見られるのではないだろうか。*Jude the Obscure* ではリアリズムを離れて「観念化」の傾向が顕著に見られるし、‘Shelleyan’とはたんに Jude と Sue の関係を表現する言葉にとどまるものではなくなっている。

「儀文は殺す」—*Jude the Obscure* と古典学

唐戸 信嘉

19世紀後半のヴィクトリア朝社会における古典学 (classics) の位相、および古典学にまつわるイデオロギーを分析の軸として、*Jude the Obscure* を読み解く。幼いジュードはオックスフォードで学ぶために古典学の学習を開始する。大学入学の計画が頓挫したのちも、古典ギリシア語やラテン語の知識は、常に彼のアイデンティティの一部であった。居酒屋で大学生を前にラテン語を暗唱する場面や、死の床に横たわる彼の枕元を飾る古典学の書物が、そのことを証している。19世紀末、古典学の知識は大学入学に必須であったばかりでなく、道徳と教養の精髓として崇められたが、その一方で、アカデミズムの外や一部の学者の間では時代遅れの学問として疑問視され始めてもいた。なぜ古典学はそのように最重要の学問となったのか。また古典学の批判者にとっては、どのような問題がそこにはあったのか。これらの問いを歴史的な文脈から検討することで、ヴィクトリア朝社会の理念とその限界を考察すると同時に、それに追従し、また裏切られたジュードの悲劇の意味を、多層的に明らかにしたいと考える。

Jude the Obscure とインチキ薬

糸多 郁子

19世紀後半から20世紀初頭の英国では、patent medicine と呼ばれる、万能薬とうたいながら実際にはほとんど効かないインチキ薬が急激に売り上げを伸ばし、社会問題となっていた。その問題を正面から取り上げたのが H. G. Wells の *Tono Bungay* (1911) であるが、同じ頃書かれた他の作家の作品においても、インチキ薬はたびたび言及されている。*Jude the Obscure* では、Vilbert という医師がインチキ薬を売っており、Jude や Arabella と話している。当時のインチキ薬は、精力増進や美容など、性に関係した目的でも使われていた。そうであれば、Vilbert が何度か登場することは、この小説における性の問題と関わっていることが考えられる。また別の文脈として、ワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』など、19世紀に大流行したオペラにおいて、インチキ媚薬が取り上げられていたことも見逃せない。今回の発表では、インチキ薬をめぐるこれらの社会的・文化的コンテクストを紹介した上で、この問題が *Jude the Obscure* にどのような意味を与えうるか、その可能性を考えてみたい。

《特別講演予告》

トマス・ハーディとイングリッシュネス 牧歌とダーウィニズム的自然観

丹 治 愛

近年、わたしは産業革命以降のイングランドのナショナル・アイデンティティ、すなわちイングリッシュネスの変遷に興味をおぼえてきた。たとえば19世紀初頭のジェイン・オースティンの作品群には、イングランドの経済的重要性がしだいに農村から都市に移行していくなかで、むしろイングランドの田園にこそ本質的なナショナル・アイデンティティを認めようとするイングリッシュネス概念があらわれている。そのような田園主義的なイングリッシュネス概念が19世紀末の『ダーバヴィル家のテス』（1891）を中心とするトマス・ハーディの文学とどのような関わりをもっているか——今回ハーディ協会からあたえていただいたこの機会を、そのような主題を考察するために利用させていただきたいと思う。

ハーディが田園を都市のうえに価値づける牧歌という文学ジャンルに属する作品によって作家としての名声を確立した1870年代なかば以降、イングランドの農村は急激に衰退していくことになるが、その動向と反比例するかのように、田園主義的なイングランド像は、失われていく田園の自然と農村の文化を保存・復興しようとする文化的運動、ならびにナショナリズムと連動しながらイデオロギー的力を劇的に拡大していく。にもかかわらずハーディは、そのような田園主義的牧歌的動向に反発するかのように、牧歌的な小説からしだいに後期の反牧歌的な小説へと小説家としてのスタイルを反時代的に変容させていく。

その反時代的な変容の要因とは何だったのか。もちろんそのひとつは、ドーセットとその周辺の農村の現実に通じていたことに由来するハーディの社会的リアリズムの深化だろう。レイモンド・ウィリアムズは、そのような社会的関心がもはや牧歌的な構図を許さなくなっていることにおいて『テス』を高く評価し、そこにこの作品の文学史的意味を認めている。しかしわたしは、特定の社会の背後にハーディが透視していた不可知論的な宇宙観、およびイングランドの牧歌的自然の背後に彼が透視していたダーウィニズム的な機械論的自然観をイングリッシュネスの主題との関連でとりあげたい。そしてそのうえで（時間が許せば）、田園主義的イングリッシュネスを脱構築するハーディのまなざしが、どのようなかたちで20世紀の作家たちに引き継がれていったかにも触れてみたい。

《編集後記》

文学研究に逆風が吹き荒れています。人間の感情を解き明かそうとする学問分野無くして、これからの教育の未来はどうなるのでしょうか。我々が研究の努力をすることによって、若い世代の育成に少しでも力を尽くすことができればと思うこの頃です。

第75号から第78号までの表紙写真は、那須雅吾先生に *Homelife in England* (London: Virtue Limited and Co.Ltd, 1879) から写真撮影をして頂いたものです。ご協力に心よりお礼申し上げます。今回も、学期末のご多忙の中、執筆者の皆様には玉稿をお寄せ頂き、感謝しております。中央大学生協印刷部の藤様と安田様には、いつも変わらぬご尽力を賜り、ありがとうございます。次号は、新しい編集委員の下で、4月発行予定。原稿締切日は2月20日です。論文、随筆は2000字程度、短信、個人消息は500字程度。皆様、奮ってご寄稿ください。ハーディに関する著書、翻訳等、編集者までご連絡をお待ちしております。